

日本近代文学における〈女の知性〉と〈反抗〉

―森田草平・菊池寛・田村俊子の作品を中心に―

文化創造専攻 国文学専修

二二〇〇二AJM 木下史帆

修士論文要旨

明治四〇年代、〈新しい女〉に代表される近代的自我に目覚めた知的な女性がブームとなり、以後そのモチーフは文学作品にもしばしば取り入れられた。そのブームの土台には、同様に文学作品で繰り返し描かれてきた「女学生」の存在がある。では、彼女らが体現していた〈女の知性〉とは、どのように表象されたのか。また、そうした表象が繰り返し描き出されることで、読者や社会にいかなる影響を与える可能性があったのだろうか。本論ではこれらの問題を、アルベール・カミュが『反抗的人間』において展開した〈反抗〉の概念を足掛かりとしながら、作品本文の分析と発表当時の文壇の反応、また読者受容から検討した。

第一章では、森田草平『煤煙』における「偶像」化の問題に関して考察した。『煤煙』のヒロインは、森田と心中未遂事件を起こした平塚らいてうがモデルとなっている。作中で作者の理想像、ファムファ

タル像として「偶像」化されたヒロインは、当時の女性達の間でも「偶像」的な人気を誇り、実際の平塚らいてうのイメージにも影響を及ぼすに至っている。そのメカニズムを、森田が本作のエピグラフで提示する「偶像」というキーワードから、明らかにした。

第二章では、田村俊子「女作者」を扱い、主に「改題」と「女性性」に着目し、論じている。〈女作者〉は「女らしい作家」でいるための「媚」を強く必要としている一方で、「女は駄目だよ」という言葉への〈反抗〉心も強く持っている。〈女〉として非常にアンビバレントな状態におかれており、その結果として「書けない」という葛藤状態に陥っていることを、本章では考察した。

第三章では、菊池寛『真珠夫人』を、物語構造の観点から捉えなおすことを目的とした。この物語では、瑠璃子の恋人であった杉野が、瑠璃子の運命の〈トリガー〉となる。主體的なように受動的でしかなく、杉野という恋人によつて一生を狂わされた「ひどく表面的な」妖婦ぶりを、本章では明らかにしている。また、本作に描かれる瑠璃子の〈反抗〉を、性質の異なる二種の〈反抗〉という視点から検討した。

ここまでの分析からみてきたものは、〈女の知性〉と〈反抗〉が結びつくこと、そしてそうした〈反抗〉が女性たちの連帯を生み出していく可能性であった。平塚らいてうや田村俊子の活躍、『真珠夫人』の歴史的的成功を鑑みれば、本論が取り上げてきた作品中に描かれた〈女の知性〉と〈反抗〉は、文学という枠を超えて、近代日本の社会と文化に広く影響を与え得るものであったと考えられる。